

計画的行動理論に基づく社会的迷惑行為の生起過程の検討

岸本陽大

(流通科学大学人間社会学部心理社会学科)

問題・目的

社会的迷惑行為とは、自己の欲求充足を第一に考え、他者に不快な感情を生起させることやその行為と定義されている(吉田他, 1998)。人は迷惑だと認知していても社会的迷惑行為をとることやその抑制に繋がるとは限らないことが示されており(出口, 2004; 吉田他, 2000)、社会的迷惑行為には態度と実際の行動の不一致が存在する。

態度と行動の不一致を説明可能な理論として荒井・菱木(2019)は計画的行動理論を挙げている。これは、行動の直接的規定因に行動意図を、行動意図の規定因に態度・主観的規範・行動統制感を仮定し、また行動統制感が行動に直接影響すると仮定した理論である(Ajzen, 1991)。この理論により、態度と行動の不一致を踏まえたうえで社会的迷惑行為の生起が説明できるかもしれない。

そこで本研究では、社会的迷惑行為の生起メカニズムを計画的行動理論に基づいて説明することを目的とする。具体的な社会的迷惑行為としては迷惑度が高いと人々に認識されている(e.g., 吉田他, 1998)「列への割り込み」行動を取り上げる。

方法

参加者 クラウドソーシングサービス上で募集した201名(男性101名, 女性100名, 平均年齢42.58歳, $SD = 9.71$)がウェブ調査に参加した。

手続き 入ろうとした店に人が並んでいた、という場面を参加者に呈示し、項目への回答を求めた。

行動として列の順守行動(逆転項目)と割り込み行動それぞれを普段からどの程度行っているか尋ねた。行動意図として列の順守意図(逆転項目)と割り込み意図それぞれを呈示場面での程度持つか尋ねた。態度として列への割り込みに対してポジティブ・ネガティブな形容詞を対にした4項目を示し、当てはまる程度を尋ねた。主観的規範として列への割り込みが周囲から期待されていると思う程度を尋ねた。行動統制感として列への割り込みをする能力があると思う程度など5項目を尋ねた。回答はいずれも7件法であった。

結果及び考察

DQS項目に正しく回答した198名(男性99名,

女性99名, 平均年齢42.44歳, $SD = 9.51$)を分析対象者とした。各変数の記述統計量をTableに示した。行動意図は α 係数が低かったため、以降の分析では2項目それぞれを独立して用いた。

計画的行動理論のモデルに従って変数間のパスを仮定し、共分散構造分析(最尤法)を行った。また意図項目間の共変関係、態度・主観的規範・行動統制感の共変関係を仮定した。モデル適合度が低かったため($\chi^2(2) = 29.66, p < .001, GFI = .956, AGFI = .535, CFI = .911, RMSEA = .264, AIC = 67.66$)、非有意なパスや共変関係の削除、標準化残差に基づくパス追加による修正を行った。

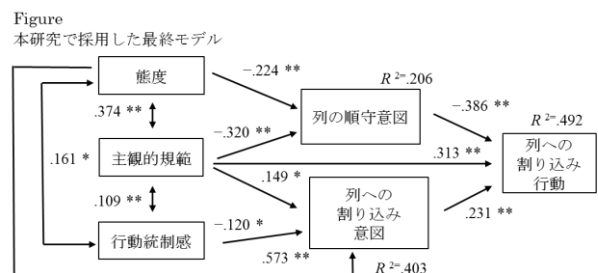
最終モデルをFigureに示した。分析の結果、態度と主観的規範が列への割り込み意図に正の影響を、列への割り込み意図と主観的規範が列への割り込み行動に正の影響を示した。行動統制感も列への割り込み意図に対して負の影響を示した。

本研究の結果、社会的迷惑行為の生起メカニズムは計画的行動理論によってある程度説明できることが示された。ただし主観的規範が直接、対象行動に正の影響を与えるなど部分的に不一致であった。周囲からの期待を感じると意図に関わらず、行動を取るからであろう。他の社会的迷惑行為にも計画的行動理論が適用可能か今後検討する必要があるだろう。

Table
各変数の記述統計量

	平均値	SD	α 係数
列への割り込み行動	1.14	0.53	.68
行動意図	1.26	0.64	.40
態度	1.51	0.77	.80
主観的規範	1.12	0.43	
行動統制感	3.01	1.22	.77

注) 態度は得点が高いほどポジティブであることを示す。



注) ** $p < .01$, * $p < .05$, $\chi^2(4) = 6.45, p = .168, GFI = .989, AGFI = .944, CFI = .992, RMSEA = .056, AIC = 40.45$, 列への順守意図は得点が高いほど順守意図が高いことを示す。